

敵国の人間でも、あの食糧であのような重労働をしてと哀れんで逃がしてくれたものと思う。生きて故郷の土を踏むまではと耐えに耐えて昭和二十三年五月十五日、舞鶴に上陸したときの感激は今も忘れられない。

紙のないシベリア抑留の苦難

千葉県 斎藤 明

一、リーダー収容所（モスクワ東南約二百キロ・

北緯約五十三度）

昭和二十年十一月六日、牡丹江の仮収容所を出発、同年十二月一日、タンボフ市の近くにあるリーダーと云う小さな町の収容所に着いた。約一か月間の有蓋貨車輸送である。

(1) 収容所

収容所は松林の中で兵舎のように見えた。建物の周囲は有刺鉄線で囲まれ、所々に望楼があり、ソ連兵が監視している。建物は半地下になっており、入口から

階段で中に降りて行く。地上に露出しているのは一メートル程の高さの屋根の部分だけである。屋根は板葺きで室内はうす暗い。ところどころ天井に明かり窓があるが、燈火がなくては思い切って歩けない。中央が通路になっていて、両側を上下二段に板で仕切っている。

北欧の十二月は特に夜が長い。太陽は午前十一時頃出て、午後三時頃見えなくなる。その前後二時間位は白夜と云って明るい時間があるだけだ。こんな建物に二百人ずつ五棟に分宿させられた。

この収容所隣にはドイツ軍将校が有刺鉄線の柵を隔てて収容された。ドイツ語の出来る人は朝夕柵越しに話をする事が出来た。

(2) 日課

一日の日課は朝八時頃（まだ薄暗い）の点呼から始まる。屋外の雪の中に整列して「お早うございます（ソ連語で）」の挨拶と人員の点検で終わる。洗面は雪で顔をこする程度。食事は黒パンで一日分三百七十グラム。それに少々の砂糖と紅茶（葉だけ）。外に毎食毎

に「カーシャ」と称するものが出た。これは肉（主としてモツ）と穀類、（コーリヤン、ピースなど）と野菜（主として馬鈴薯）の煮込みスープだけである。

毎日の作業として、薪取り、水汲み、建物周囲の清掃、雪かき等があった。極寒地帯で薪炭が無いと一日も生活が出来ない。毎朝隊列を整えソ連兵に警護されて五キロ、十キロの雪道を森林の中まで徒歩で枯れ木や生木を取りに行った。かついだり、縄で肩にかけたりして引っ張って歩くのである。まことに長い行列となった。

日常の中で困ったのは便所で、第一に建物から五十メートル以上離れた所にあるので、昼間はともかく、夜はすっかり体が冷えきってしまう。なお大便の場合は紙がないので、あり合わせのものがある間はどうかやう間に合ったが、それが尽きると皆困ってしまった。

通訳を通じて古雑誌なり古新聞の支給を申し出たが「生活の必需品ではない」と云うことでつい帰国まで支給されなかった。しかし夏の間はまだよかった。作業途中などで紙代用の植物の葉をもって間に合わせ

たからである。便所の形式は大きな部屋（板敷き）に一定の距離間隔をおいて直径二十五センチ位の円い穴が十数個ならんでいるだけである。「個人別のしきりなし」である。後になって幾分精神的な余裕が出た頃五人抜き相撲とかけて何と解く。

ソ連の便所と解く。

その心は。しきりなし。

とやらかした者もいた。

また、これは収容所が他地区に変わってからのことであるが、私はある時一週間位の間、毎日洗濯をやらされたことがある。が収容所関係のソ連下士官クラスの下着の洗濯でチリ紙を使用していないであろう事実を発見して、なるほど生活必需品ではないと思ったことである。

(3) 入浴とシラミ退治

一週間に一回、入浴と消毒が行われた。入浴といっても暖房してある浴室で洗面器大の桶に一杯だけの湯を配給されて、これで体全体を洗うのである。この時脱いだ衣服を全部消毒室で熱気による消毒を行うので

ある。目的は、シラミがよく発生するのでこの退治と乾燥消毒である。また毎月一回身体検査が行われた。

医務室で裸になり白衣の婦人（看護婦か女医）に臀部を見せる。尻の肉をさわってみて栄養状態の良否を判定するのである。またこの機会に陰部の毛をきれいに剃られてしまうのである。（毛ジラミ予防）

(4) 日本新聞と身上調査

毎月一回、日本新聞と云う一枚紙（現大新聞の四分の一位の大きさ）が四〜五人に一枚位の割合で配布された。内容は日本語版で、当時の内地の現状と世界情勢が書かれてあった。ソ連の意図は赤化教育の一環であることがよく分かった。読み終わった新聞紙は小さく切って煙草の巻紙に使われた。便所まではとても回り切れない。

収容されて一段落した頃、全員について身上調査が行われた。一人ずつソ連調査官の前に呼び出されて、階級、氏名、所属部隊、職名等が聞かれる。先方では予め準備してあった日本軍の部隊編成表に基づいて確認し、必要事項を聞いていた。この調査で戦犯関係者

も出たことだろう。私たちは幹部教育隊所属だっただけに調査は簡単であった。

二、エラブカ収容所（モスクワ東方約六百キロ、北緯約五十度）

リーダー収容所で一冬を越し多少生活に慣れた頃、次の収容所への移転となった。各自手製のリュックを担ぎ昭和二十一年七月十八日リーダーを後にした。途中徒歩行軍・貨物列車・徒歩行軍と重ねてカマ河（ボルガ河支流）に近いエラブカに移った。（所要日数十日位）

この収容所は洞窟式地下施設とは異なり、コンクリート三階建の普通の建物でA・Bに分かれていたが、最初B収容所に入り、本格的な労働作業が始まった。主なる作業は、農耕・森林伐採・同運搬・鉄道建設（路盤工事）・工場内の雑役等であった。作業により百人・二百人位が一团となって近隣地区に派遣されるという形がとられた。収容所の出入りは非常に厳格で相当の時間を要した。五列縦隊にして下士官クラスが数えるのであるが、算数的能力が低く容易ではない。

いじ悪く時々列を乱して困らせたりしたこともあった。抑留中唯一回だけ労働賃金として十ルーブル貰ったことがある。何に使ったか覚えていないが一部持ち帰って記念にとつてある。

日常の収容所内の生活はラーダーと大体同じであり、一番困った便所もまた別棟に離れて築かれた掘っ立て小屋で吹き流し、寒冷は身にしみるものであった。

かくて昭和二十二年十月、A収容所に移り、同月末帰国の為エラプカを去る。

凍土に眠る戦友を悼む

滋賀県 陌間 政雄

聞き手 本日は、お忙しいところお邪魔しまして恐縮に存じます。早速でございますが、まず入ソまでのことについて話していただき、抑留中体験され、帰国されるまで、お話し願いたいと思います。

陌間 陌間です。私は昭和十八年一月学校卒業後、

満州車両(株)へ入社しました。昭和十九年十一月徴兵検査を受け、昭和二十年五月二十日公主嶺機動第二連隊(七五〇部隊)第二五二三部隊へ入営、昭和二十年七月二十九日、南東満国境線配備、敦化を経て鏡泊湖山岳陣営についておりました。

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を陣営で聞いた。昭和二十年八月二十六日、吉林機動兵舎第二連隊で武装解除を受けた。

八月二十五日、ソ連軍指揮により、敦化飛行場へ集結、千名単位の編成で集団を結成させられた。八月二十六日、関東軍からの略奪物資(兵器、医療用器具、薬剤、食糧、被服等)の貨車積み込み作業に二十日間程従事させられた。

昭和二十年九月十六日、敦化駅で乗車、ダモイだと言われて出発、九月十八日ハルビン駅で貨物車に乗り換え、九月二十日入ソ、この間の食事はカンメンパンで過ごした。十月三日、アルタイ地方ロストフカ第一収容所へ入所、約千名単位であった。

入所以来約一か月間、大根の千切り干しが常食であ